



オンライン酪農体験対応マニュアル

● オンライン酪農体験のメリット

食



- 生産過程が間近に見られることにより、食といのちが近づく。

- ▶タイミングが合えば
 - ・出荷される牛(廃牛)に会える。
 - ・牛乳が出荷される場所が見られる。
 - ・搾乳の様子が見られる。

参考:体験前に牛乳の飲み比べをしておくとおもしろい。

いのち



- 牛の体
 - ・牛達を見ることで、今の様子が感じられる。
 - ・牛に近づける。
 - じっくりと牛の体を観察できる。

- 牛といのち
 - ・いのちが継続して繋がれる。
 - ▶タイミング合えば
 - ・死～出荷される牛に会える。
 - ・生～出産をタイムリーに見ることができる。

しごと



- 実際の酪農体験では見ることができない(立ち入りできない場所など)酪農家の仕事ぶりを見ることができる。

- (例)・搾乳の様子
 - ・朝、夕方の仕事
 - ・ローリー車
 - ・ミルクパーラーの下からの見学

その他



- 双方の危険性が減る。
- 時間とお金(交通費等)が節約できる。

● オンライン酪農体験の進め方

[1] 打ち合わせのための事前準備(学校)

- ① 教員自身の学び。知っている人に相談。
- ② 酪農教育の取り組みの VTR を見て、学んでおく。
- ③ 酪農教育での子供の変容や、わかりやすくまとめた研究結果を調べておく。
- ④ できれば牧場見学または体験しておく。

[2] 事前打ち合わせ(学校／牧場)

- ① 授業のねらいの共有。
- ② 授業の構想、酪農家に話してほしいことを伝えておく。
- ③ 先生の役割と酪農家の役割を明確にする。
- ④ 子どもの声を聞く時や止める時などのサインを決める。
- ⑤ 予想されることについて、説明用のイラストなどの準備。

[3] 事前学習(学校)

- ① 事前指導と事後指導を含めた計画を立てる。
- ② 子どもたちの現状をもとに、教師が目的をはっきりさせて事前の学習を行う。
- ③ 導入の動画のようなものを使って、価値づけをしておく
- ④ 「何を見たいか?」「知りたいのか?」などまとめ、子どもに課題意識をもたせる。

[4] 実施前の事前準備(学校／牧場)

(1) 機材

- ① カメラを両方において、教室の映像を牧場に送る。
- ② 牧場はできれば、写す方と説明する方と複数で対応する。
- ③ 電波環境を整備するための予算や、貸し出し用の Wi-Fi 機器を準備しておく。
- ④ カメラワークのリハーサルをする。ジンバルで手ブレを防ぎ、カメラワークは子どもの目線で撮影する。

(2) リアルに近づける工夫

- ① えさを送っておくとか、等身大の牛の布幕を準備するとか、新たな問いを生み出すようにする。
- ② 五感を刺激する物を提示(えさなど)。
- ③ 途中で牛の実物大の幕を出す。

[5] オンライン酪農体験の実施(学校／牧場)

(1) 教室でのファシリテーション

- ① 見やすい座席配置。
- ② 先生と酪農家の会話形式にする。
- ③ 教員は2人で対応。
 - ・1人は子どもの反応を拾い、酪農家に伝える。気づきを酪農家に伝えて、酪農家がコメントしやすくする。
 - ・子どもの反応が良かった場面を蓄積しておき、共有する。
- ④ 進行の仕方
 - ・牧場タイムと教室タイムに分け、メリハリをつけてデザインする。
 - ・止めるときは止めて進行する。

参考:子どもも自分のタブレットで参加しながら、質問や感想をチャットで伝える方法もある。

(2)酪農家のファシリテーション

- ①酪農家らしさや自分の牧場経営に誇りをもって話していただく。酪農家の悩みや創意工夫など、真実が聞けるとありがたい。
- ②今日のテーマについて、最後に伝える。
- ③説明しにくいものは、図や絵を見せる。
- ④途中、先生とコミュニケーションを取る。④必要であれば、教師が割って入って調整する。
- ⑤説明しにくいものは、図や絵を見せる。途中、先生とコミュニケーションを取る。
- ⑥必要であれば、教師が割って入って調整する。
- ⑦子どもの声を時々聞く。
- ⑧児童が参加できるコーナー(クイズなど)を、途中で入れる。



留意点

- ・説明の時に使うとわかりやすい表現を、手引きなどで整理しておく。
- ・方言も入れながらフレンドリーに話す。
- ・「おじさんの牧場はね～」のように、子どもに語りかける。

[6]事後の活動(学校／牧場)

(1)教師と酪農家の反省会

- ①次につながるように、終わった後どうだったか話をする。
- ②子どもたちの変容。
- ③意見交換する。

(2)事後学習と発信

- ①オンライン後に酪農家を感じられたことを聞いて、必要なことを子どもたちに教師が伝える。
- ②児童のふりかえり
体験をしたことで自分のどこが変わったか。「わかったこと」やさらに「知りたいこと」をまとめ、「次に何をしたいか」「何ができるか」を話し合っておく。実生活とのつながりを考える。
御礼とともにふりかえりを酪農家に伝え、酪農家からも感想を返してもらい、それを教師が価値づけする。
質問には、オンライン等で酪農家に答えてもらう。
- ③子どもたちの調べ学習の成果を伝える。
学んだことの表現。新聞作りやオンラインで学校から牧場へ伝える。

(3)継続的に展開する、交流を続けるための提案

～1回だけのイベントにならないように～

- ①定期的な交流会の設定。酪農家が許せば、オンラインで交流を続ける。
- ②子牛の成長を定期的にオンラインで見えていく。
- ③目的を変えた(低学年へ教えるための)オンライン交流の設定。
- ④子どもたちが知りたいと思ったことを、もう一度オンラインで牧場から酪農家に答えてもらう。
- ⑤給食などを通じた交流の設定。
- ⑥可能であれば酪農家に学校に来てもらい、酪農家とリアルな場面でも交流する。
- ⑦いわゆるハイブリット型体験。オンラインからの疑問を個人課題設定、牧場のリアル体験で解決。
- ⑧新たに生まれた問題を追及できるように支援する。体験の第2弾とか継続できたら学びが深まる。
- ⑨可能であれば家庭にも働きかけて、牧場に足を運べるとよい。